

中間試験のお知らせ

6月17日(月) 13:30 ~ 15:00

紀-B210 教室 (ここ)

- Taylor 展開を巡る諸々
(来週(6/10)の講義内容まで)
- 学生証必携

詳細は追って

さて、今回は、

大学の数学の講義らしく

ちゃんと**定理の証明**をします。

本講義では、中間試験後にもう一回、
ちゃんと定理の証明をする回がある予定

Taylor 展開の問題点（考えなくてはならないこと）

- 級数が収束するか？
- 収束したら元の関数と一致するか？
- 誤差の理論的評価は？
- 項別微積分（極限操作の順序交換）を行なってよいか？

→ “Taylor の定理”

Taylor 展開の剰余項

“形式的” Taylor 展開

$$\begin{aligned} f(x) &\sim f(0) + f'(0)x + \frac{f''(0)}{2}x^2 + \dots \\ &= \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n \end{aligned}$$

で、右辺の和が収束する時、

$$\sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n \left(= \lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{n=0}^N \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n \right) = f(x)$$

であるか？

Taylor 展開の剰余項

$$\lim_{N \rightarrow \infty} \sum_{n=0}^N \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n = f(x)$$



$$\left| f(x) - \sum_{n=0}^N \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n \right| \longrightarrow 0 \quad (N \rightarrow \infty)$$

$$R_N(f; x) := f(x) - \sum_{n=0}^{N-1} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

: N 次の剰余項 (remainder)

Taylor 展開の剰余項

形式的 Taylor 展開が収束して、元の関数 $f(x)$ と一致

$$f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$



$$|R_N(f; x)| \longrightarrow 0 \quad (N \longrightarrow \infty)$$

→ 剰余項 $R_N(f; x)$ の評価 (estimate) が問題

Taylor の定理

$f : \mathbb{N}$ 回微分可能 ($N \geq 1$)

$$R_N(f; x) := f(x) - \sum_{n=0}^{N-1} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

とするとき、

$$0 < \exists \theta < 1 : R_N(f; x) = \frac{f^{(N)}(\theta x)}{N!} x^N$$

$$0 < \exists \theta < 1 : R_N(f; x) = \frac{f^{(N)}(\theta x)}{N!} x^N$$

系

(1 つ取って固定した x に対して)

$$\exists C > 0 : \forall N : 0 < \forall \theta < 1 : |f^{(N)}(\theta x)| < C^N$$

$$\implies |R_N(f; x)| \longrightarrow 0 \quad (N \longrightarrow \infty)$$

従って、

$$f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

注

$N = 1$ のときは、何を言っているのか？

$$0 < \exists \theta < 1 : R_1(f; x) = f'(\theta x)x$$

つまり

$$\frac{f(x) - f(0)}{x - 0} = f'(\theta x)$$

… (Lagrange の) 平均値の定理

Taylor の定理 … 平均値の定理の高次版

Taylor の定理の証明の方針

平均値の定理を次々と繰り返して用いて
次数を上げていく

数学的帰納法の形で証明を記述すると明快

“帰納法の仮定” を f' に適用
($(f', N - 1) \implies (f, N)$ の流れ)

Taylor の定理の証明の方針

簡潔な証明のためには、

「平均値の定理」を少し一般化しておく必要有り
(Cauchy の平均値の定理)

ここでは、その元になる基本的な

「Rolle の定理」

から見ていこう

Rolle の定理

f : 閉区間 $[a, b] = \{x \mid a \leq x \leq b\}$ で連続

开区間 $(a, b) = \{x \mid a < x < b\}$ で微分可能

$$f(a) = f(b)$$

$$\implies \exists c \in (a, b) : f'(c) = 0$$

Rolle の定理 (証明の概略)

$f : [a, b]$ で連続、 (a, b) で微分可能、 $f(a) = f(b)$
 $\implies \exists c \in (a, b) : f'(c) = 0$

- $[a, b]$ で連続な関数には最大値・最小値が存在
← 実数の基本性質が必要
- 最大値・最小値を取る点 $x = c$ で $f'(c) = 0$
← 微分係数の定義

$$f'(c) = \lim_{h \rightarrow 0} \frac{f(c+h) - f(c)}{h}$$

で、分母分子の符号を見よ

Cauchy の平均値の定理

f, g : 共に 閉区間 $[a, b]$ で連続
開区間 (a, b) で微分可能

- $\nexists c \in (a, b) : f'(c) = g'(c) = 0$
- $g(a) \neq g(b)$

$$\implies \exists c \in (a, b) : \frac{f(b) - f(a)}{g(b) - g(a)} = \frac{f'(c)}{g'(c)}$$

注 : $g(x) = x$ の時が **Lagrange** の平均値の定理

Cauchy の平均値の定理 (証明の舞台裏)

f, g : 共に $[a, b]$ で連続、 (a, b) で微分可能

- $\nexists c \in (a, b) : f'(c) = g'(c) = 0$ • $g(a) \neq g(b)$

$$\implies \exists c \in (a, b) : \frac{f(b) - f(a)}{g(b) - g(a)} = \frac{f'(c)}{g'(c)}$$

Rolle の定理で見付かる $h'(c) = 0$ となる c が
所望の c になるような関数 h が作れば良い

$$(g(b) - g(a))f'(c) - (f(b) - f(a))g'(c) = 0$$

$$h'(x) = (g(b) - g(a))f'(x) - (f(b) - f(a))g'(x)$$

となる h を考えよう

Taylor の定理

$f : \mathbb{N}$ 回微分可能 ($N \geq 1$)

$$R_N(f; x) := f(x) - \sum_{n=0}^{N-1} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

とするとき、

$$0 < \exists \theta < 1 : R_N(f; x) = \frac{f^{(N)}(\theta x)}{N!} x^N$$

$$0 < \exists \theta < 1 : R_N(f; x) = \frac{f^{(N)}(\theta x)}{N!} x^N$$

系

(1 つ取って固定した x に対して)

$$\exists C > 0 : \forall N : 0 < \forall \theta < 1 : |f^{(N)}(\theta x)| < C^N$$

$$\implies R_N(f; x) \longrightarrow 0 \quad (N \longrightarrow \infty)$$

従って、

$$f(x) = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{f^{(n)}(0)}{n!} x^n$$

Taylor の定理 (証明の方針)

$$0 < \exists \theta < 1 : R_N(f; x) = \frac{f^{(N)}(\theta x)}{N!} x^N$$

数学的帰納法 : “帰納法の仮定” を f' に適用
($(f', N-1) \implies (f, N)$ の流れ)

準備 : $R_N(f; 0) = 0$, $R'_N(f; x) = R_{N-1}(f'; x)$

Cauchy の平均値の定理を用いて次数を上げていく

作戦 : Cauchy の平均値の定理の f, g をどう取る ?

例題

$f(x) = e^x$ の Taylor 展開の剰余項 $R_N(f; x)$ について、

- (1) $|R_N(f; x)|$ の具体形は？
- (2) $|R_N(f; 1)| < 10^{-4}$ となる
(出来ればなるべく小さい) N を与えよ
- (3) e の近似値を小数第 3 位まで求めよ
- (4) 誤差が 10^{-3} 以下であることを保証せよ
(丸め誤差・打切誤差の双方を考慮に入れよ)

意欲のある人は小数第 5 位まで求めてみよう
(その場合、(2) の部分はどうすれば良い?)